

## 第2章

ラグビーフットボールに関する  
認知度・関心度・観戦行動の基礎調査  
～インターネット調査と観戦者調査の比較研究～

## 調査概要

### 1. 調査目的

本調査は今後のラグビーの振興・普及・強化に資する基礎的なデータの収集を目的とする。今回はラグビーを取り上げるが、本調査研究委員会ではトップスポーツと地域スポーツの関係に言及する問題意識のもとにある。すなわち、国内トップレベルのリーグやチームが、当該エリアの学校運動部やスポーツ少年団、民間スポーツクラブと、どのような関係性にあるのか。この両者が或る地域社会の中で、どのような形で並存しているのか、を探求し、相乗効果を検証する視座にある。それは、新たなシステムの構築に向けたデータの収集・蓄積である。今回は対象をラグビーに限定し、インターネット調査とスタジアム観戦者への質問紙調査によって、観戦歴（直接観戦・間接観戦）と属性（性別、年齢、居住地、世帯年収等）との関係、観戦歴と今後の観戦意向の関係、ラグビーに関する知識の認知度とラグビーとの関わり方の関係、観戦者のトップチームへの要望などについて実態を探った。

### 2. 調査内容

調査内容は次の4項目に大別される。

- I 回答者の属性について
- II ラグビー観戦歴と今後の観戦意向について
- III ラグビーに関する認知と関わり方について
- IV ラグビー観戦実態とトップチームへの要望について

### 3. 調査対象

- ①ヤマハスタジアムに訪れたラグビー観戦者  
(ジャパンラグビートップリーグ第6節 ヤマハ発動機対神戸製鋼)
- ②全国の市区町村に在住する男女

### 4. 調査期間

- ①ラグビー観戦者調査：2015（平成27）年12月19日
- ②インターネット調査：2015（平成27）年12月14日～12月16日

### 5. 調査方法

- ①調査員による質問紙を用いた面接聞き取り調査（附録1参照）

※ヤマハスタジアムにて実施

調査委託機関：株式会社サーベイリサーチセンター 調査事務局

〒116-8581 東京都荒川区西日暮里2-40-10 担当：鈴木 TEL：03-3802-6775

- ②インターネット調査（附録2参照）

調査実施機関：公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

### 6. 回収結果

- ①ラグビー観戦者調査回答者数：496人
- ②インターネット調査回答者数：3697人

### 7. 調査報告並びにトピックス内に示した図表の注意事項

- ・帯グラフにおいて3%未満のデータラベルは非表示とした
- ・各集計結果詳細は、巻末の附録3・4掲載

## 要約

- ◆ 観戦者調査回答者の性別は男性 45.2%、女性は 54.8%で、女性が男性を上回った。年齢構成は 40 代が 23.6%、50 代が 19.6%であった。
- ◆ インターネット調査における性別は男性 50.4%、女性 49.6%で、男性が女性を上回った。年齢構成は 60 代が 19.4%、30 代が 18.0%と続いた。
- ◆ インターネット調査でラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会以前の観戦状況をたずねたところ、男女ともに年齢が高いほど観戦経験があった。各年齢の男女差は年齢が高くなるほど男性が女性を上回るとともに、女性の観戦経験は年齢による違いは認められなかった。
- ◆ ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会以前の観戦経験では、観戦者調査で男性の 82.1%、女性の 52.6%が観戦経験をもち、いずれもインターネット調査を大きく上回った。年代毎の観戦有無の割合は、概ね年齢が高くなるにつれて観戦経験者の割合が高くなるという傾向がある。
- ◆ インターネット調査でラグビーワールドカップ 2019 日本大会の観戦意向をたずねると、直接観戦よりもインターネット観戦を希望しており、その回答にはラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会以前の観戦有無は影響していない。
- ◆ ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会に出場した日本代表選手のうち 10 人の認知状況をたずねたところ、インターネット調査の認知率 16.5%に対して、観戦者調査では 3 倍以上の 53.8%で観戦者の関心の高さがうかがえた。
- ◆ 認知率の高かった上位 3 選手を観戦者調査とインターネット調査で比較すると、観戦者調査はインターネット調査の「五郎丸歩」で 1.2 倍、「リーチマイケル」で 2.5 倍、「畠山健介」で 6.5 倍となるように、インターネット調査の認知率が下位になるほど、その倍率は大きくなる。
- ◆ インターネット調査でラグビーに関するトピックをたずねた認知率は、「ラグビーワールドカップ 2019 日本大会開催」50.4%、「ラグビー日本代表・五郎丸歩選手のスーパーラグビーレッズ加入」43.6%であったが、「2016 年スーパーラグビーへの日本参戦」は 20.9%にとどまった。
- ◆ ラグビーに関するトピック 7 項目を観戦者調査とインターネット調査でたずねた結果、知っていると回答した割合は「ラグビー日本代表・五郎丸歩選手のスーパーラグビーレッズ加入」90.1%・43.6%、「ラグビーワールドカップ 2019 日本大会開催」86.9%・50.4%、「7 人制女子日本代表のリオ五輪出場」76.6%・43.5%であった。最も認知率の低かった「2008 年度小学校学習指導要領改訂にともなう一部小学校でのラグビー授業導入」では 32.7%・6.7%であり、観戦者調査はインターネット調査の 5 倍弱の認知率である。
- ◆ 観戦者調査で「ラグビートップチームに対する希望・要望」をたずねると「選手やチームによる学校や職場訪問」36.9%、「選手やチームによるルール解説講座」35.7%などであった。男女間に統計的な有意差は認められないが、「選手やチームによる学校や職場訪問」（男性：32.1%、女性：40.8%）、「選手やチームによるルール解説講座」（男性：30.8%、女性：39.7%）で女性の回答が男性を上回った。

## I 回答者の属性について

図1は回答者の性別を示している。「男性」は45.2%、「女性」は54.8%となり、女性の回答者数が男性を上回った。

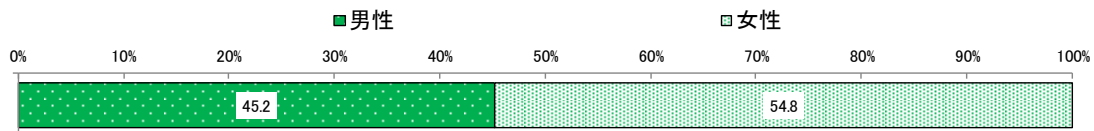


図1. 性別【観戦者調査】(n=496)

図2は回答者の年齢を示している。最も多かった順から「40代」が23.6%、「50代」が19.6%と続いて、その他については「10代」が14.5%、「20代」が14.5%、「60代」が14.1%、「30代」が13.7%であった。

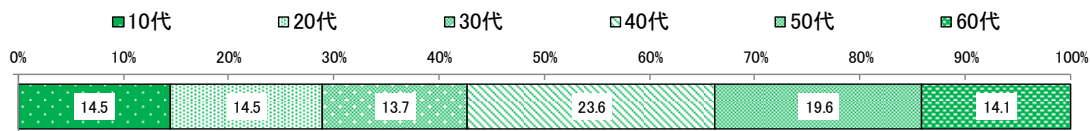


図2. 年齢【観戦者調査】(n=496)

表1は回答者の在住都道府県を示している。最も多かったのは「静岡県」74.2%で、続いて「愛知県」8.7%、「東京都」2.8%、「神奈川県」2.0%であった。中部地方だけでなく関東からも観戦に来ていた。

表1. 在住都道府県【観戦者調査】(n=496)

都道府県	割合 (%)	都道府県	割合 (%)
静岡県	74.2	北海道	0.6
愛知県	8.7	長野県	0.6
東京都	2.8	山口県	0.6
神奈川県	2.0	茨城県	0.4
兵庫県	1.6	福井県	0.4
三重県	1.4	山梨県	0.4
大阪府	1.4	奈良県	0.4
千葉県	1.0	鳥取県	0.4
岐阜県	1.0	京都府	0.2
埼玉県	0.8	鹿児島県	0.2
滋賀県	0.8		

図3は回答者の性別を示している。「男性」は50.4%、「女性」は49.6%となり、男性の回答者数が女性を上回った。

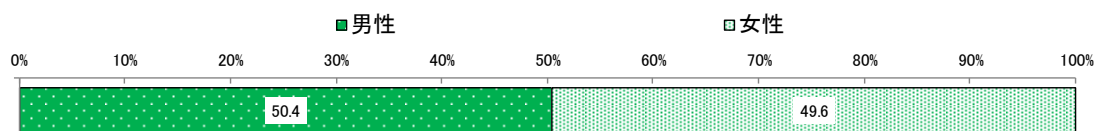


図3. 性別【インターネット調査】(n=3697)

図4は回答者の年齢を示している。最も多かったのは「60代」の19.4%で、「30代」が18.0%、「40代」が16.8%、「50代」が16.6%、「20代」が13.6%と続いた。

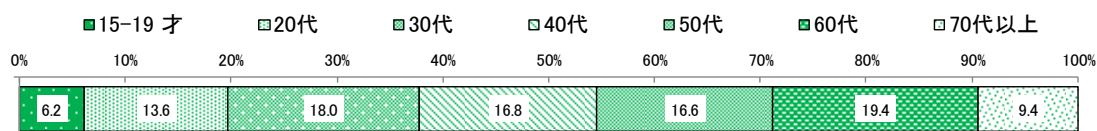


図4. 年齢【インターネット調査】(n=3697)

表2は回答者の在住都道府県を示している。最も多かったのは「東京都」の12.5%で、続いて「神奈川県」8.6%、「大阪府」7.2%と続いた。

表2. 在住都道府県【インターネット調査】(n=3697)

都道府県	割合 (%)	都道府県	割合 (%)	都道府県	割合 (%)
東京都	12.5	三重県	1.5	岩手県	0.8
神奈川県	8.6	群馬県	1.4	高知県	0.8
大阪府	7.2	奈良県	1.3	大分県	0.8
愛知県	6.1	福島県	1.2	石川県	0.7
福岡県	5.2	茨城県	1.2	富山県	0.6
千葉県	5.0	岐阜県	1.2	和歌山県	0.6
埼玉県	4.8	愛媛県	1.2	徳島県	0.6
兵庫県	4.6	熊本県	1.2	香川県	0.6
北海道	4.5	鹿児島県	1.2	宮崎県	0.6
広島県	2.8	山形県	1.1	沖縄県	0.6
静岡県	2.6	山口県	1.1	山梨県	0.5
宮城県	2.2	青森県	1.0	佐賀県	0.5
京都府	2.1	秋田県	1.0	福井県	0.4
岡山県	1.6	栃木県	1.0	鳥取県	0.3
新潟県	1.5	長崎県	1.0	島根県	0.3
長野県	1.5	滋賀県	0.9		

図5は回答者の世帯年収を示している。最も多かったのが「200～400万円未満」で22.4%、「400～600万円未満」が21.3%、「600～800万円未満」が12.4%と続いた。

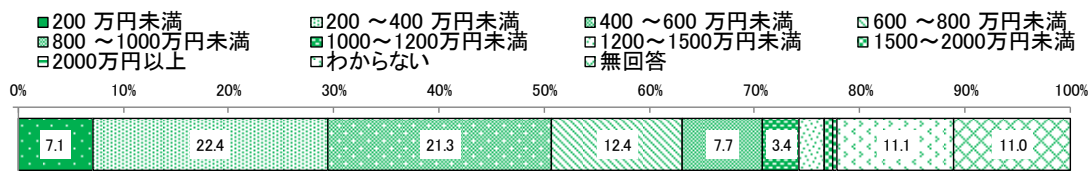


図5. 世帯年収【インターネット調査】(n=3697)

図6は回答者の個人年収を示している。最も多かったのが「200万円未満」で38.7%、「200～400万円未満」が21.6%、「400～600万円未満」が12.3%と続いた。

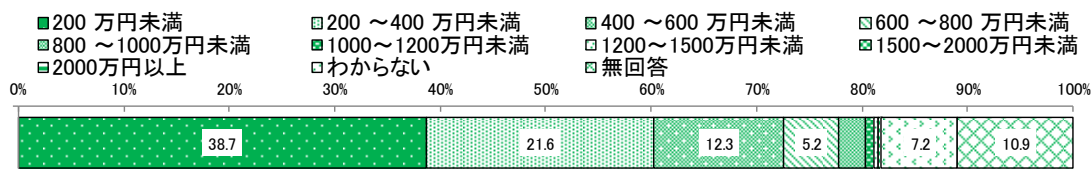


図6. 個人年収【インターネット調査】(n=3697)

図7は回答者の職業を示している。特徴的であったのが、最も多かった順に「専業主婦(主夫)」の21.6%、「無職」の11.5%と続いたことである。この結果から、図6で触れたように個人年収200万円未満の回答者が38.7%いたが、この大多数は専業主婦(主夫)と無職の層であったことが推察される。

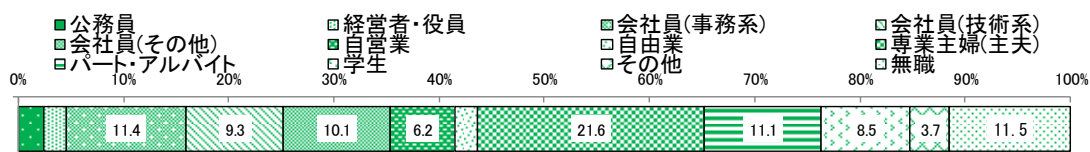


図7. 職業【インターネット調査】(n=3697)

(中村英仁)

## Ⅱ ラグビー観戦歴と今後の観戦意向について

ここではインターネット調査で回答を得た対象者のうち、ラグビー観戦経験者の特徴を探るために、観戦経験有無別に、その属性を検討した。比較指標とする個人的属性は、性別、年齢、世帯年収、居住地域などで、さらに両者の観戦意向についても言及した。なお、過去の観戦歴は、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会以後の一時的な熱狂を排除するために、この大会以前の観戦経験を指標とした。ただし、ここでの観戦とはスタジアムでの直接的な観戦とテレビやインターネット動画などの間接的な観戦、両者を含めている。

図 8 に過去のラグビーの観戦経験を男女別に示した。観戦経験者は、「男性」41.2%、「女性」20.3%で、男女差が確認できる。

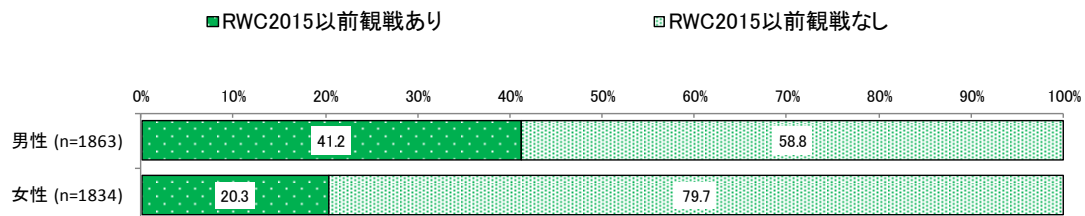


図 8. 男女別観戦経験の有無【インターネット調査】

図 9 には調査対象者を 15-19 才、20 代、30 代、40 代、50 代、60 代、70 代以上という 7 つの年齢群に分け、男女別の観戦経験率を示した。男性については、30 代で僅かに「観戦経験あり」と答えた者が 20 代に比べて低くなるものの、概ね、年齢が高くなると「観戦経験あり」とする者の割合が高くなるということが読み取れる。女性については、年齢が高い群で「観戦経験あり」とする者の割合が増えるという傾向はみられない。

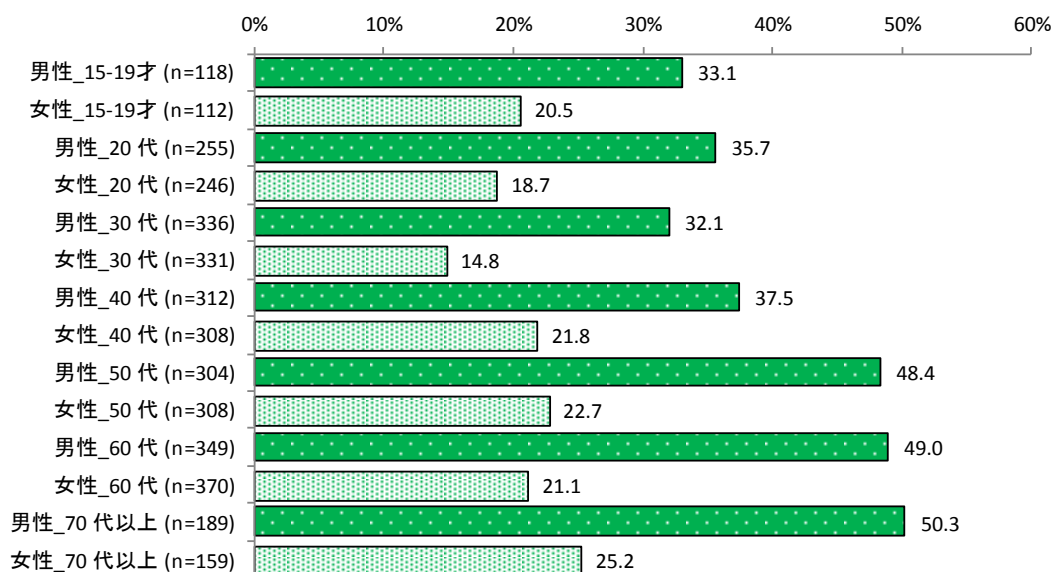


図 9. 性年代別の観戦経験者の割合【インターネット調査】

図 10 には地域別に「観戦経験あり」と回答した者の割合を示した。「東北地方」35.3%、「近畿地方」34.1%、「関東地方」31.8%、「九州地方」30.8%、「中部地方」27.5%、「四国地方」26.9%、「北海道」26.7%、「中国地方」26.9%となる。

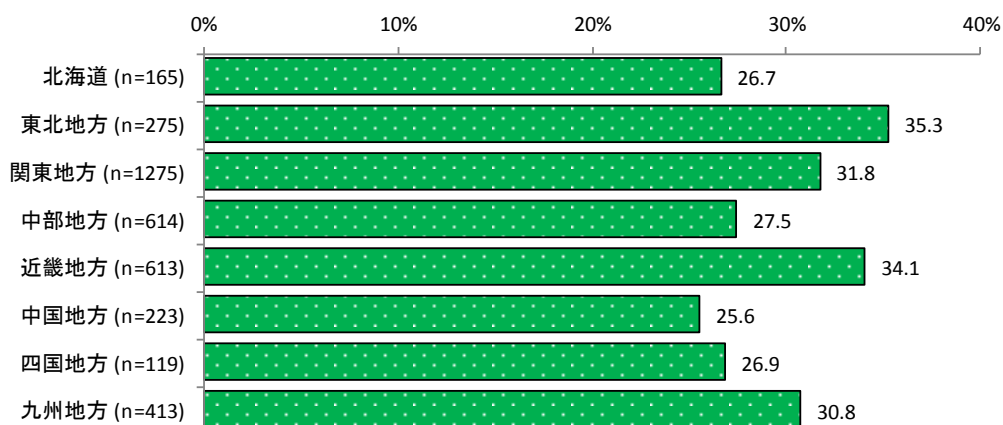


図 10. 地域別観戦経験者の割合【インターネット調査】

男女で分けて地域別に「観戦経験あり」と回答した者の割合をみたものが図 11 である。男性で全国平均 41.2%を上回っている地域は、「東北地方」51.4%、「近畿地方」46.8%であった。女性で全国平均 20.3%を上回っている地域は、「関東地方」22.2%、「九州地方」21.4%、「近畿地方」21.3%であった。

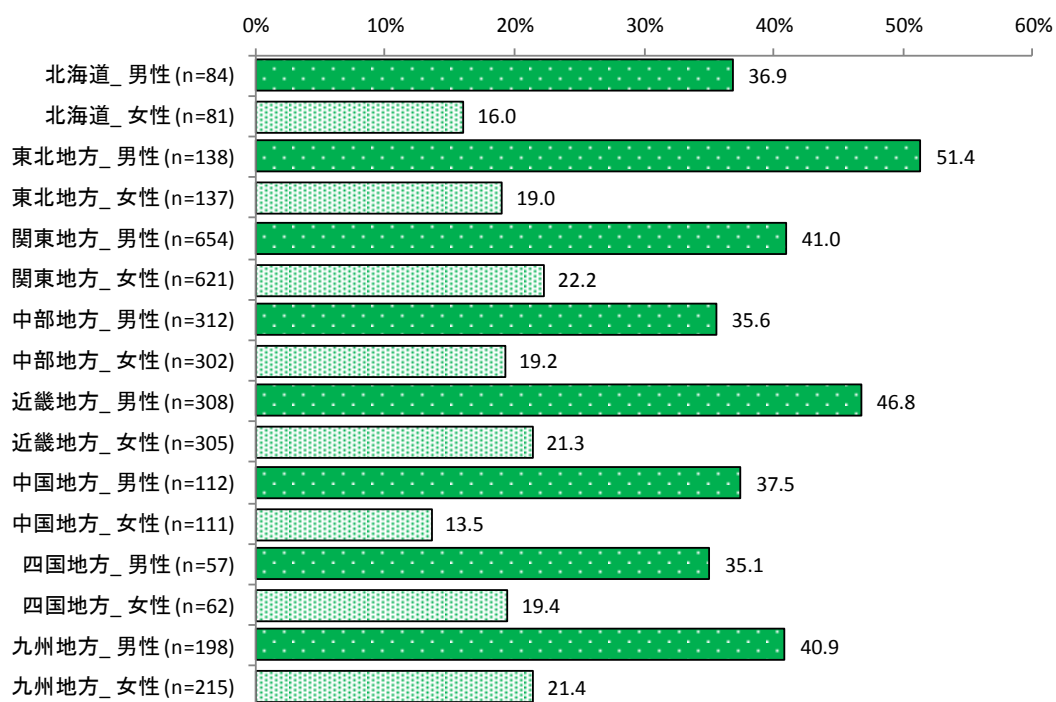


図 11. 各地域における男女別観戦経験者の割合【インターネット調査】



図 12 には世帯年収別に「200 万円未満」、「200～400 万円未満」、「400～600 万円未満」、「600～800 万円未満」、「800～1000 万円未満」、「1000～1200 万円未満」、「1200～1500 万円未満」、「1500～2000 万円未満」、「2000 万円以上」のグループを設定し、それぞれのグループにおける「観戦経験あり」と回答した者の人数を示した。「観戦経験あり」とする者の数は「400～600 万円未満」のグループで一番多く（239 人）、そこから年収が増えるにつれて観戦経験が減少する。

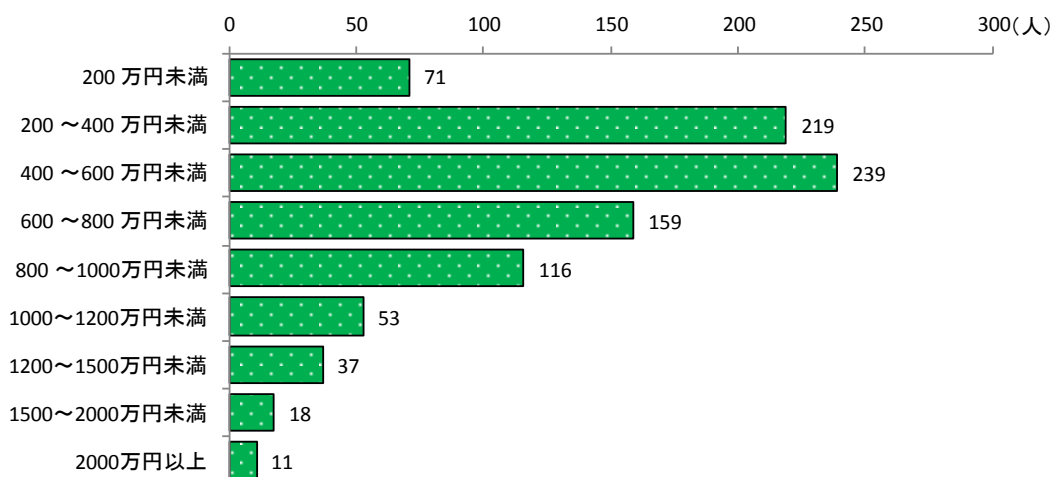


図 1 2. 世帯年収別観戦経験者の人数【インターネット調査】

他方、図 13 に示すように、世帯年収別グループにおける「観戦経験あり」とする者の割合についてみると、世帯年収が高いグループになるに従って、概ね、高くなる傾向にある。このような傾向は、図 14 に示した個人年収別グループについてもみて取れる。

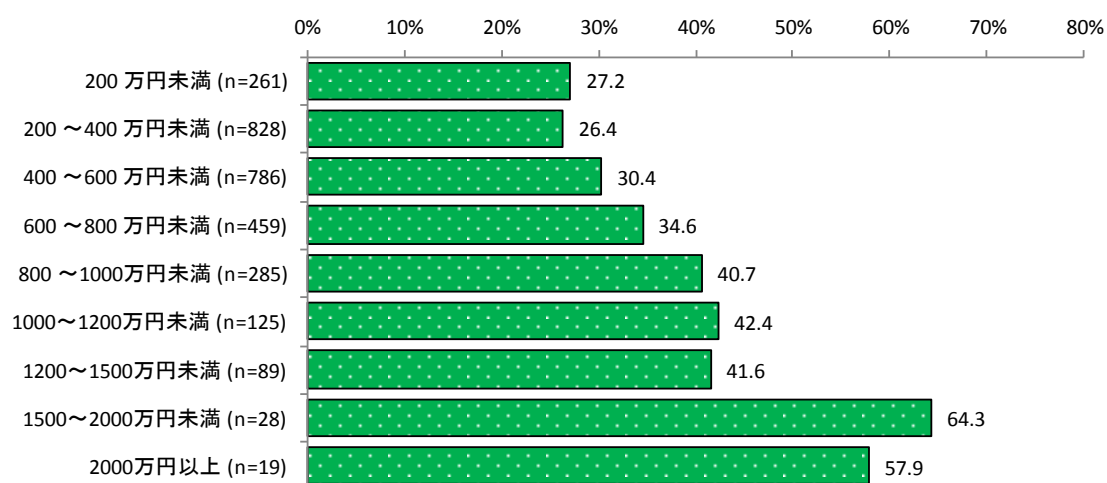


図 1 3. 世帯年収別観戦経験者の割合【インターネット調査】

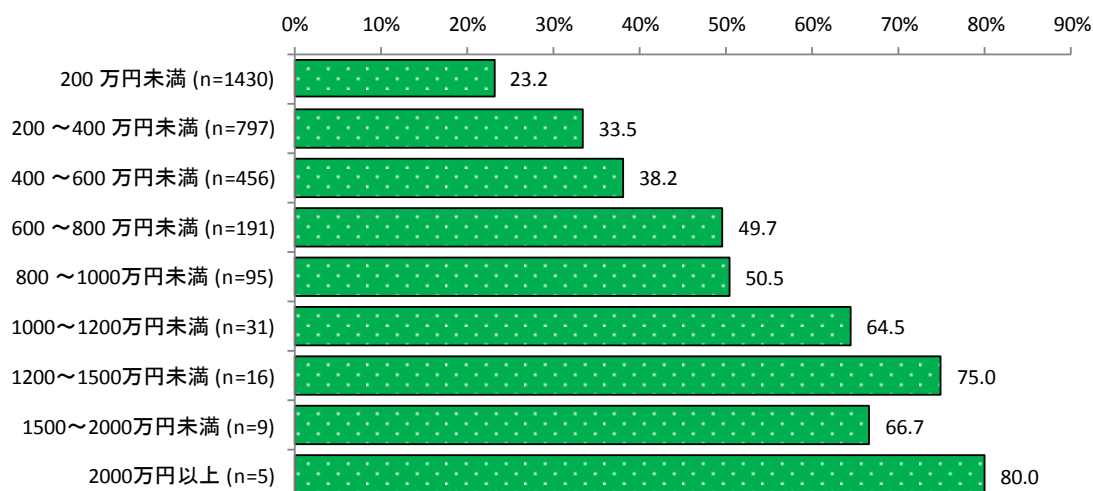


図 1 4. 個人年収別グループにおける観戦経験者の割合【インターネット調査】

図 15 には、過去にラグビーの「観戦経験あり」とする者（1141 人）と「観戦経験なし」とする者（2556 人）のグループ別に、それぞれの程度の割合の者がラグビーワールドカップ 2019 日本大会を観戦したいと思っているかを示した。

- ① 「日本代表の試合を会場で観戦したい」と回答した者の割合は「観戦経験あり」34.9%、「なし」8.5%であった。
- ② 「日本代表の試合をテレビやインターネットの動画で観戦したい」では「観戦経験あり」68.4%、「なし」33.9%であった。
- ③ 「日本代表以外の試合を会場で観戦したい」では「観戦経験あり」16.1%、「なし」1.7%であった。
- ④ 「日本代表以外の試合をテレビやインターネットの動画で観戦したい」では「観戦経験あり」24.5%、「なし」9.9%であった。

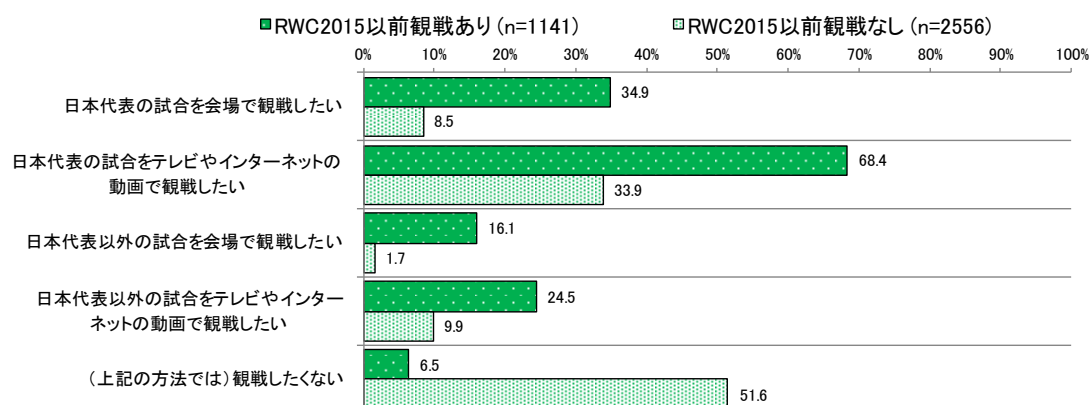


図 1 5. 観戦経験別ラグビーワールドカップ 2019 観戦意向【インターネット調査】

同様な傾向は図 16 に示した「競技レベルごとの観戦意向」にも読み取れる（この図においても単位は人数とした）。直接観戦を希望する者は「あり」群と「なし」群で大きな差が認められるが、間接観戦についてみれば直接観戦の両群の差よりも差が小さくなっている。特に、日本代表の国際試合や日本選手権などの競技レベルの高い試合に対しては観戦経験の「ない」者であっても多くの者が観戦意向を示しているということがわかる。

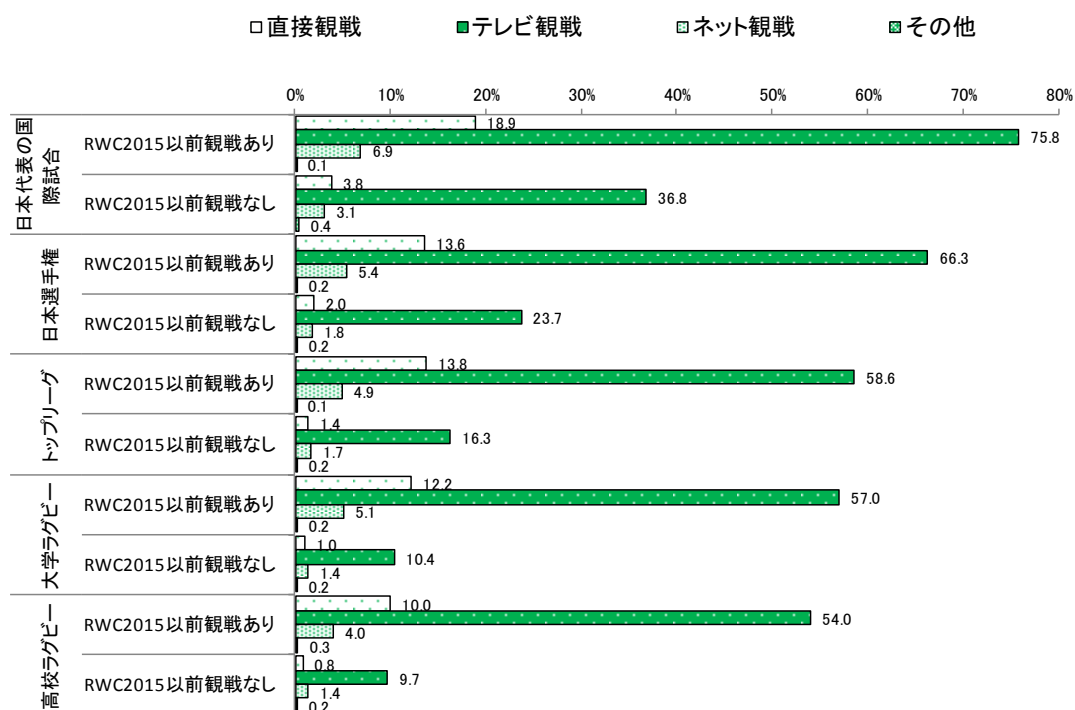


図 16. 観戦経験別競技レベルごとの観戦意向【インターネット調査】

(岡本純也)

### Ⅲ ラグビーに関する認知と関わり方について

#### 1. ラグビー日本代表選手の認知状況

ラグビーワールドカップ2015イングランド大会での日本代表チームの活躍の短期的な効果として、メディア露出に伴う選手の知名度向上があげられる。そこで、ラグビーワールドカップ2015イングランド大会での代表選手の名前について「知っている」「聞いたことがある」「知らない」の選択肢でたずね、認知状況を調べた。対象選手はラグビーワールドカップ2015イングランド大会の代表選手のうち、インターネットの検索エンジン・Googleでヒット数が多かった上位10人を選出した上で、年代別に選んだ過去の日本代表選手11人を加えた、合計21人を五十音順に氏名を列挙した。

図17にインターネット調査の結果を示した。インターネット調査では、ラグビーワールドカップ2015イングランド大会の主な日本代表選手10人の平均認知率（「知っている」と回答した者）は16.5%、「聞いたことがある」を合わせると23.4%にのぼった。認知率が高い上位3選手は「五郎丸歩」（81.4%）、「リーチマイケル」（31.6%）、「田中史朗」（10.0%）で上位3選手間での認知率の差が大きい。また、10人の平均認知率が3位「田中史朗」の認知率を上回り、上位2人の認知率が全体の平均値を押し上げている。すなわち「五郎丸歩」と「リーチマイケル」が突出してメディアに露出している。

また、過去の主な日本代表選手11人の平均認知率は10.0%で、「聞いたことがある」を合わせると15.9%であった。認知率が高い上位3人は「大八木淳史」（24.7%）、「松尾雄治」（21.8%）、「大畑大介」（20.9%）で、いずれもラグビーワールドカップ2015イングランド大会代表の認知率3位「田中史朗」よりも高い値となった。これらの選手は現役時代の活躍に加えて、引退後のタレント活動や指導者としてメディアに、しばしば取り上げられるので認知度が高いと推察される。

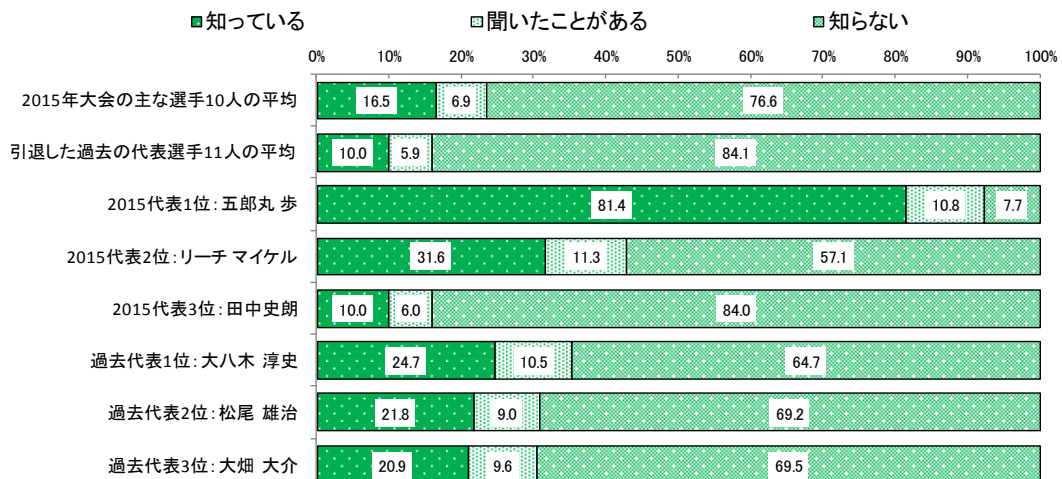


図17. ラグビー日本代表選手の認知率：2015年大会と過去の大会【インターネット調査】  
(n=3697)

図 18 にはスタジアム観戦者による認知率を示した。観戦者調査では、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会の主な日本代表選手の平均認知率は 53.8%に上り、認知率が高かった上位 3 選手は、「五郎丸歩」(97.2%)、「リーチマイケル」(79.8%)、「畠山健介」(56.3%)であった。この結果をインターネット調査と比較すると「五郎丸歩」の認知率は 1.2 倍、「リーチマイケル」は 2.5 倍、「畠山健介」は 6.5 倍と、分母となるインターネット調査の認知率が低い下位ほど倍率が大きくなる。それはラグビーに興味がない回答者が含まれるインターネット調査に対して、コアなラグビーファンを多く含む観戦者調査の特徴が、選手の認知度の違いにあらわれていると推察される。

さらに、観戦者調査における過去の主な代表選手の平均認知率は 26.2%に上るが、それはインターネット調査の 2.6 倍となる。認知率が高い上位 3 人は「大畑大介」(51.8%)、「大八木淳史」(41.1%)、「平尾誠二」(40.5%)であった。上位 3 人の認知率はインターネット調査と異なり、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会代表の認知率 3 位(56.3%)よりも低い値となっている。また、20 代以下のスタジアム観戦者では「大八木淳史」と「平尾誠二」の認知率は 10%程度であり、スタジアムに足を運ぶ若い世代は過去の代表選手への関心が相対的に低いと判定できる。

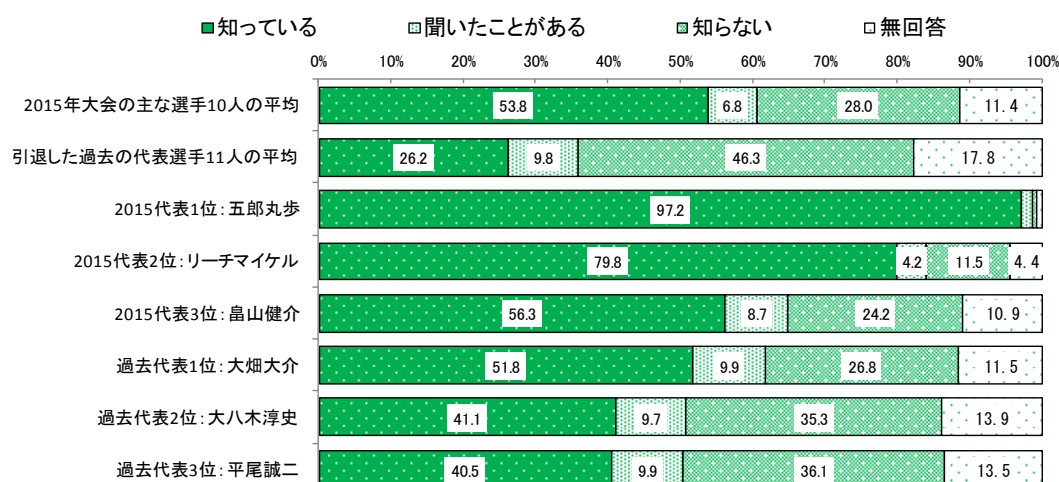


図 18. ラグビー日本代表選手の認知率：2015 年大会と過去の大会【観戦者調査】  
(n=496)

表 3 では選手の認知状況を性別で検討した。インターネット調査ではラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会代表の「五郎丸歩」を除き、過去の代表選手を含めて、認知率は男性が女性を上回っており、過去の代表選手上位 3 人の認知率は女性が男性の半分程度であった。観戦者調査においても、各選手の認知率は男性が女性よりも高いが、インターネット調査と比べてその差は小さくなっている。年代別ではインターネット調査、観戦者調査ともに、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会代表選手の認知率に差はないが、過去の代表選手では年齢が高くなるにつれて認知率が高くなる傾向があり、認知率の上位選手にも違いが確認された。

表3. ラグビー日本代表選手の認知率（性別・年代別）

【インターネット調査：ラグビーワールドカップ2015代表選手】

順位	男性(n=1863)	認知率(%)	女性(n=1834)	認知率(%)
1	五郎丸歩	80.1	五郎丸歩	82.8
2	リーチマイケル	39.7	リーチマイケル	23.3
3	田中史朗	12.5	田中史朗	7.5

順位	20代以下(n=731)	認知率(%)	30-40代(n=1287)	認知率(%)	50代以上(n=1679)	認知率(%)
1	五郎丸歩	74.6	五郎丸歩	81.4	五郎丸歩	84.4
2	リーチマイケル	28.7	リーチマイケル	35.6	リーチマイケル	29.8
3	田中史朗	10.5	田中史朗	11.7	島山健介	8.7

【インターネット調査：過去の代表選手】

順位	男性(n=1863)	認知率(%)	女性(n=1834)	認知率(%)
1	大八木淳史	33.6	大八木淳史	15.7
2	大畑大介	29.1	松尾雄治	14.8
3	松尾雄治	28.6	大畑大介	12.6

順位	20代以下(n=731)	認知率(%)	30-40代(n=1287)	認知率(%)	50代以上(n=1679)	認知率(%)
1	大畑大介	11.5	大畑大介	25.9	松尾雄治	33.9
2	大八木淳史	4.7	大八木淳史	25.0	大八木淳史	33.2
3	平尾誠二	4.2	平尾誠二	19.3	平尾誠二	26.3

【観戦者調査：ラグビーワールドカップ2015代表選手】

順位	男性(n=224)	認知率(%)	女性(n=272)	認知率(%)
1	五郎丸歩	97.3	五郎丸歩	97.1
2	リーチマイケル	83.0	リーチマイケル	77.2
3	田中史朗	63.4	島山健介	51.1

順位	20代以下(n=144)	認知率(%)	30-40代(n=185)	認知率(%)	50代以上(n=167)	認知率(%)
1	五郎丸歩	95.1	五郎丸歩	98.9	五郎丸歩	97.0
2	リーチマイケル	74.3	リーチマイケル	85.9	リーチマイケル	77.8
3	島山健介	47.2	田中史朗	64.9	堀江翔太	60.5

【観戦者調査：過去の代表選手】

順位	男性(n=224)	認知率(%)	女性(n=272)	認知率(%)
1	大畑大介	64.3	大畑大介	41.5
2	大八木淳史	57.6	平尾誠二	29.0
3	平尾誠二	54.5	大八木淳史	27.6

順位	20代以下(n=144)	認知率(%)	30-40代(n=185)	認知率(%)	50代以上(n=167)	認知率(%)
1	大畑大介	29.2	大畑大介	62.7	松尾雄治	64.7
2	吉田義人	18.1	大八木淳史	48.1	平尾誠二	59.9
3	大八木淳史	11.1	平尾誠二	46.5	大畑大介	59.3

注) 認知率:「知っている」と回答した者の割合

2. ラグビー関連トピックスの認知状況

図19ではインターネット調査による、ラグビーワールドカップやオリンピックなど、近年のラグビーに関するトピックスの認知状況を示した。「2019年に日本でラグビーワールドカップが開催される」を「知っている」と回答した者は50.4%でラグビーワールドカップの日本開催は2人に1人が知っている。スーパーラグビーに関するトピックス「ラグビー日本代表の五郎丸歩選手がスーパーラグビーの「レッズ」に加入した」の認知率が43.6%で、「2016年から世界最高峰のリーグ「スーパーラグビー」に日本が参加する」の20.9%を大きく上回った。また、リオ2016オリンピック競技大会については「2016年リオ五輪の7人制ラグビーに、女子日本代表の出場が決定した」が43.5%、「2016年リオ五輪から7人制ラグビーが正式競技になった」および「2016年リオ五輪の7人制ラグビーに、男子日本代表の出場が決定した」が41.8%であった。さらに、性別で比較すると、すべてのト

ピックスで男性の認知率が女性よりも高かった。図 20 の年代別では、ほとんどのトピックスで年齢が高くなるにつれて認知率が高くなる傾向にある。

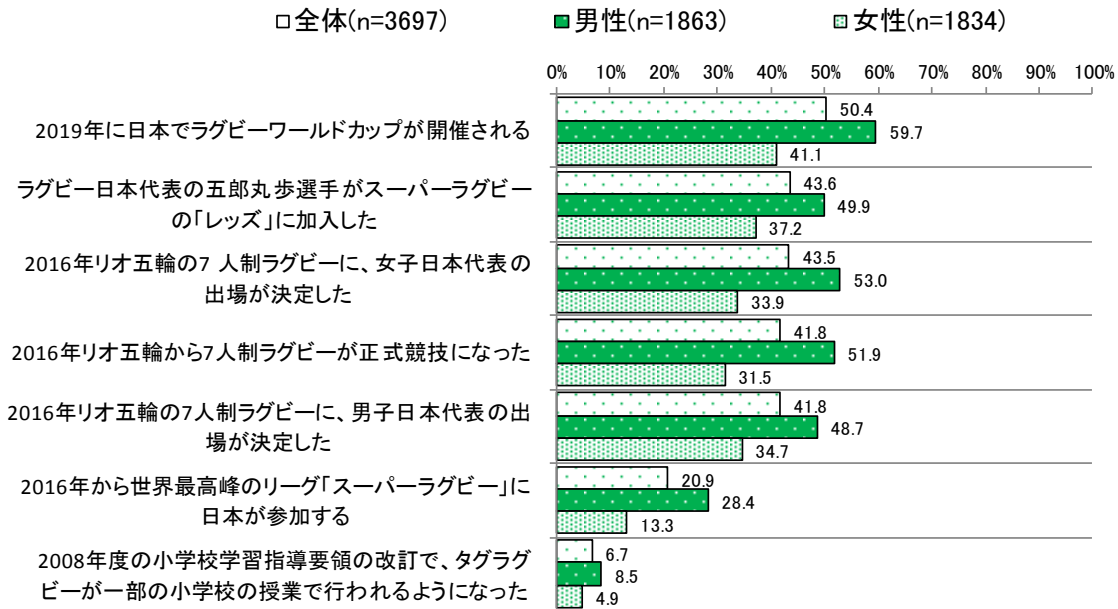


図 19. ラグビー関連トピックスの認知状況【インターネット調査】(性別)

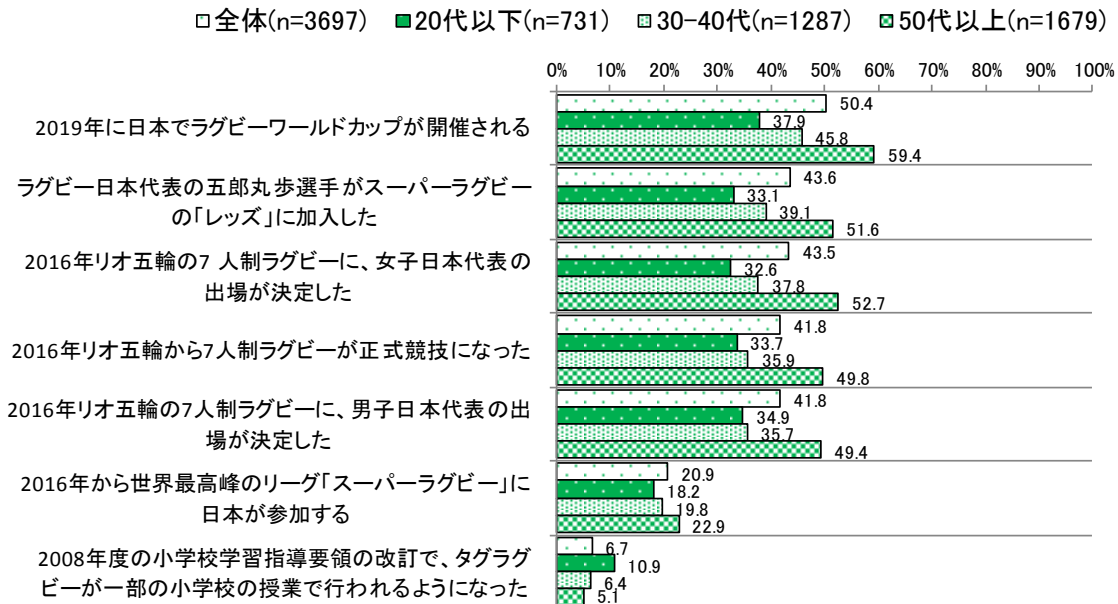


図 20. ラグビー関連トピックスの認知状況【インターネット調査】(年代別)

図 21 ではラグビーに関するトピックスをスタジアム観戦者にたずねた結果を示した。「五郎丸選手がレッズに加入」が 90.1%と最も認知率が高く、「2019 年ワールドカップ日本開催」(86.9%)、「7 人制女子日本代表がリオ五輪出場」(76.6%)の順となっている。インター

ネット調査でも同様だが、2016年リオ五輪に関するトピックスでは、女子日本代表の出場が最も認知率が高かった。女子が出場権を獲得した試合と調査時期がほぼ同時期であったためかもしれない。

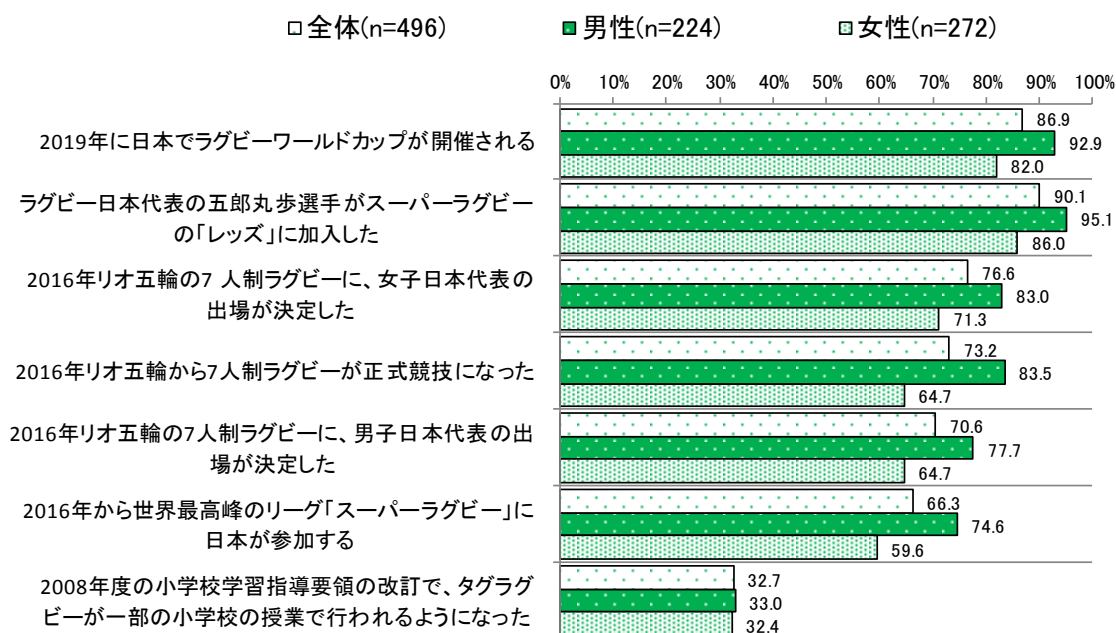


図 2 1. ラグビー関連トピックスの認知状況【観戦者調査】(性別)

図 22 ではこのトピックスに関して年代別に検討した。「2008年度の小学校学習指導要領の改訂で、タグラグビーが一部の小学校の授業で行われるようになった」は 32.7%にとどまり、他のトピックスと比べて低い値であったが、観戦者の認知率はインターネット調査の 5 倍弱と高く、スタジアム観戦者の 3 人に 1 人は小学校の授業にタグラグビーが導入されていると解釈できる。年代別にみると、インターネット調査と同様に、ほとんどのトピックスで年齢が高くなるにつれて認知率が高くなる傾向がみられた。



□全体(n=496) ■20代以下(n=144) ▨30-40代(n=185) ▩50代以上(n=167)

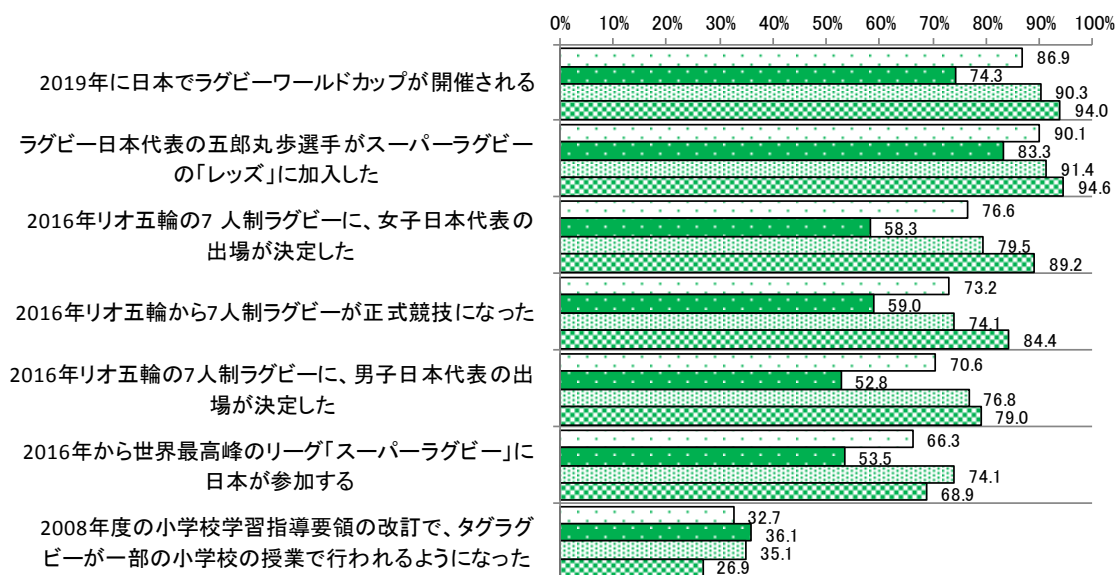


図2.2. ラグビー関連トピックの認知状況【観戦者調査】(年代別)

### 3. ラグビーとの関わり

アンケート回答者とラグビーとの関わりについてラグビー経験を中心にたずねた。表4に示したインターネット調査では「あなたの親しい友人が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある」(11.8%)が最も多く、次いで、「学校の授業でラグビー(タグラグビー、タッチラグビーを除く)をしたことがある」(11.6%)、「配偶者と子供以外のあなたの家族や親族が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある」(4.6%)などとなっている。

性別にみると、男性で多かったのは「学校の授業でラグビーを経験」(20.6%)、「親しい友人がラグビーをしている(いた)」(14.5%)、「過去に、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた」(5.5%)などであった。「現在、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている」(1.8%)と合わせて、現在または過去に、部活動やサークルなどでラグビーをしていたのは、男性回答者の7.3%となっている。

一方、女性では、「親しい友人がラグビーをしている(いた)」(9.1%)、「配偶者・子供以外の家族や親族がラグビーをしている(いた)」(4.1%)、「過去に、配偶者・交際相手が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた」(4.0%)の割合が大きかった。少なくとも、いずれかの選択肢に「はい」と回答した者(ラグビーと何らかの関わりのある者)は、全体で25.1%、男性が32.9%、女性が17.1%であった。

表4. 回答者とラグビーとの関わり【インターネット調査】

(%)

	全体 (n=3697)	男性 (n=1863)	女性 (n=1834)
現在、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	1.3	1.8	0.8
過去に、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	3.3	<b>5.5</b>	1.0
現在、配偶者・交際相手が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	1.1	1.6	0.7
過去に、配偶者・交際相手が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	3.0	1.9	<b>4.0</b>
現在、あなたの子供が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	0.5	0.6	0.4
過去に、あなたの子供が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	1.5	1.5	1.4
配偶者と子供以外のあなたの家族や親族が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある	4.6	<b>5.2</b>	4.1
あなたの親しい友人が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある	<b>11.8</b>	<b>14.5</b>	<b>9.1</b>
あなた、または配偶者・交際相手の職場に現在または過去にラグビーチームがある(あった)	3.3	3.9	2.8
学校の授業でラグビー(タグラグビー、タッチラグビーを除く)をしたことがある	<b>11.6</b>	<b>20.6</b>	2.5
上記のいずれかに「はい」と回答した者の割合	<b>25.1</b>	<b>32.9</b>	<b>17.1</b>

注1)5%以上10%未満を太字に、10%以上を太字+下線で示した。

注2)女性の値が男性の値を上回るセルを白抜きで示した。

また、表5に示す観戦者調査では「親しい友人がラグビーをしている(いた)」が35.3%と全体の1/3を占めており、次いで「学校の授業でラグビーを経験」(18.3%)、「あなた、または配偶者・交際相手の職場に現在または過去にラグビーチームがある(あった)」(10.3%)などとなっている。ヤマハ発動機ジュビロのホームゲームでの調査のため、同社の社員や関係者が多数来場していたと推察される。

性別にみると、男性で多かったのは「親しい友人がラグビーをしている(いた)」(46.0%)、「学校の授業でラグビーを経験」(26.3%)、「過去にラグビーをしていた」(16.5%)などであった。現在または過去に部活動やサークルなどでラグビーをしていたのは、男性回答者の23.6%とインターネット調査の3倍以上となっている。部活動やサークルなどでのラグビー経験が、試合の直接観戦に結びついていると考えられる。

女性では「親しい友人がラグビーをしている(いた)」(26.5%)、「配偶者・子供以外の家族や親族がラグビーをしている(いた)」(12.5%)、「学校の授業でラグビーを経験」(11.8%)

の割合が大きかった。また、男性と比較すると「過去に配偶者・交際相手がラグビーをしていた」(8.8%)や「過去に、あなたの子供が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた」(4.0%)の割合が大きくなっている。女性については、友人や家族のラグビー経験と直接観戦行動との関連が示唆された。少なくとも、いずれかの選択肢に「はい」と回答した者は、全体で53.8%、男性が63.8%、女性が45.6%であり、スタジアム観戦者の半数がラグビーとの何らかの関わりを有していた。

表5. 回答者とラグビーとの関わり【観戦者調査】

	(%)		
	全体 (n=496)	男性 (n=224)	女性 (n=272)
現在、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	4.2	7.1	1.8
過去に、学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	8.5	<b>16.5</b>	1.8
現在、配偶者・交際相手が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	3.6	3.6	<b>3.7</b>
過去に、配偶者・交際相手が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	7.1	4.9	<b>8.8</b>
現在、あなたの子供が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしている	3.0	3.1	2.9
過去に、あなたの子供が学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていた	3.0	1.8	<b>4.0</b>
配偶者と子供以外のあなたの家族や親族が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある	10.1	7.1	<b>12.5</b>
あなたの親しい友人が、現在または過去に学校部活動・サークルやクラブチーム等に所属してラグビーをしていたことがある	<b>35.3</b>	<b>46.0</b>	<b>26.5</b>
あなた、または配偶者・交際相手の職場に現在または過去にラグビーチームがある(あった)	10.3	10.7	9.9
学校の授業でラグビー(タグラグビー、タッチラグビーを除く)をしたことがある	<b>18.3</b>	<b>26.3</b>	11.8
上記のいずれかに「はい」と回答した者の割合	<b>53.8</b>	<b>63.8</b>	<b>45.6</b>

注1) 10%以上15%未満を太字に、15%以上を太字+下線で示した。

注2) 女性の値が男性の値を上回るセルを白抜きで示した。

(澁谷茂樹)

#### IV ラグビー観戦実態とトップチームへの要望について

ここではスタジアム観戦者を対象とした調査をもとに、トップリーグの試合観戦者の実態についてみていく。

##### 1. 調査対象者の居住地特性

表 6 に今回の観戦者調査の回答者の居住地を都道府県別にまとめた。調査対象の 496 人中、368 人 (74.2%) が静岡県在住であり、次いで隣県の愛知県在住者が 43 人 (8.7%)、その後に東京都 14 人 (2.8%)、神奈川県 10 人 (2.0%) と続く。静岡県在住者の中で磐田市民は 99 人 (対象者の 20.0%) おり、磐田市に袋井市、掛川市を合わせた者をここでは「近隣」群とした (それ以外を「近隣ではない」群とした) が、対象者の中に 240 人 (48.4%) が含まれる (「近隣ではない」群は 256 人 (51.6%))。

表 6. 調査対象者の居住地 (都道府県) 【観戦者調査】 (n=496) (上段: 人・下段: %)

北海道	茨城県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	近隣
3	2	4	5	14	10	2	2	3	5	368	240
0.6	0.4	0.8	1.0	2.8	2.0	0.4	0.4	0.6	1.0	74.2	48.4
愛知県	三重県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	鳥取県	山口県	鹿児島県		
43	7	4	1	7	8	2	2	3	1		
8.7	1.4	0.8	0.2	1.4	1.6	0.4	0.4	0.6	0.2		

図 23 には対象者を「近隣」－「近隣ではない」別に男女の人数、割合を示した。「近隣」群は男性 43.8%、女性 56.3%から構成され、「近隣ではない」群は男性 46.5%、女性 53.5%から構成される。

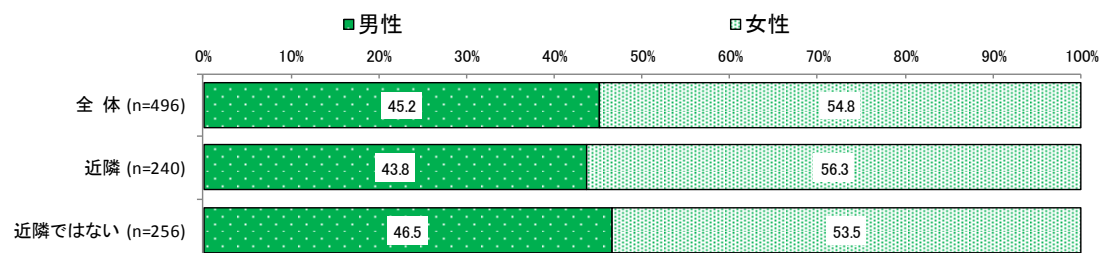


図 23. 近隣居住者と近隣ではない居住者の性別 【観戦者調査】

表 7 には「近隣」群と「近隣ではない」群別にヤマハスタジアムでの観戦回数の平均を示した。「近隣」群では平均 4.60 回、「近隣ではない」群では 2.04 回となっている。

表 7. 近隣居住者と近隣ではない居住者のヤマハスタジアムでの観戦回数の平均 【観戦者調査】

	観戦回数(平均)
全体 (n=496)	3.28
近隣 (n=240)	4.60
近隣ではない (n=256)	2.04

## 2. チケット入手方法

図 24 はチケット入手方法を居住地域別（近隣－近隣ではない）に示した。観戦チケットの入手をまず有料でみると、有料チケット購入は①前売販売と当日販売に大別され、さらに前売販売は、②一般小売、③割引券利用、④会員特典利用（ファンクラブ・社内後援会引換券）に細分化される。この①②③は現金が、④は会員特典という年会費がそれぞれの対価となっている。ここに入手に支出を伴わない⑤招待券が加わる。

全体では割引券や特典を利用しない「前売販売」28.0%・「当日販売」7.7%の合計 35.7%と「ヤマハ発動機招待券・ファンクラブ引換券」46.6%で大半を占める。招待券・ファンクラブ引換券では「日本ラグビー協会メンバーズクラブ招待券」2.8%、「神戸製鋼招待券・ファンクラブ引換券」2.4%を加えると 51.8%の大半に上る。

「近隣」と「近隣ではない」を比較すると「近隣」の「前売販売」15.8%・「当日販売」9.6%、合計 25.4%に対して、「近隣ではない」では「前売販売」39.5%・「当日販売」5.9%、合計 45.4%に達する。さらに「ヤマハ発動機招待券・ファンクラブ引換券」に着目すると「近隣」58.8%と「近隣ではない」35.2%となる。

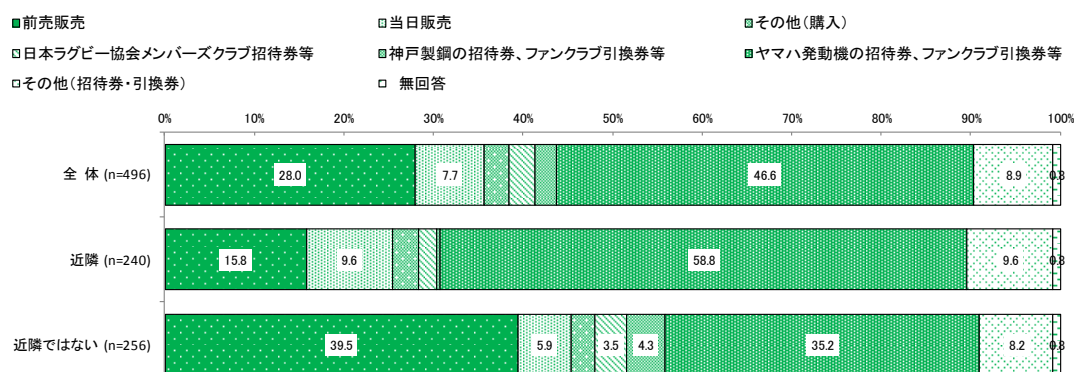


図 24. 居住地域別チケット種別【観戦者調査】

## 3. 観戦歴

スタジアム観戦者調査においても、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会以前の観戦の有無について対象者にたずねている。先述したように、この大会以前と限定しているのは、歴史的快挙とも評価されている日本代表の活躍の影響をできるだけ避けるためである。

図 25 に男女別に観戦経験の有無について結果を示した。スタジアム観戦に足を運ぶだけあって、インターネット調査に比べて「観戦経験あり」とする者の割合は男女ともに 82.1%（男性）、52.6%（女性）と高くなっている（インターネット調査：男性 41.2%、女性 20.3%）。

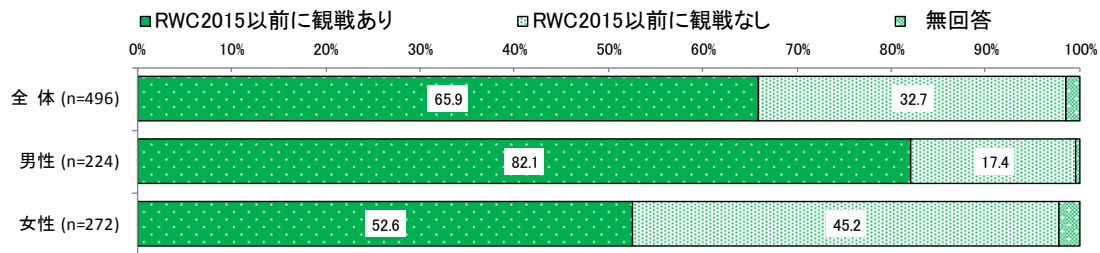


図 25. ラグビーの男女別観戦経験の有無【観戦者調査】

図 26 には年代・性別に「観戦経験あり」と回答した者と「観戦経験なし」と回答した者の割合を示した。男女ともにどの年代においても、インターネット調査と比較して観戦経験者の割合は高くなっていることが分かる。男性の観戦経験者は、30代において20代よりも割合が僅かに下がるものの、概ね年齢が高くなるにつれて観戦経験者の割合が高くなるという傾向が読み取れる。女性の観戦経験者は、インターネット調査では年代が上がっても割合が高くなるという傾向は認められなかったが、スタジアム観戦者調査では年代が上がるにつれて割合が高くなるという傾向が認められる。

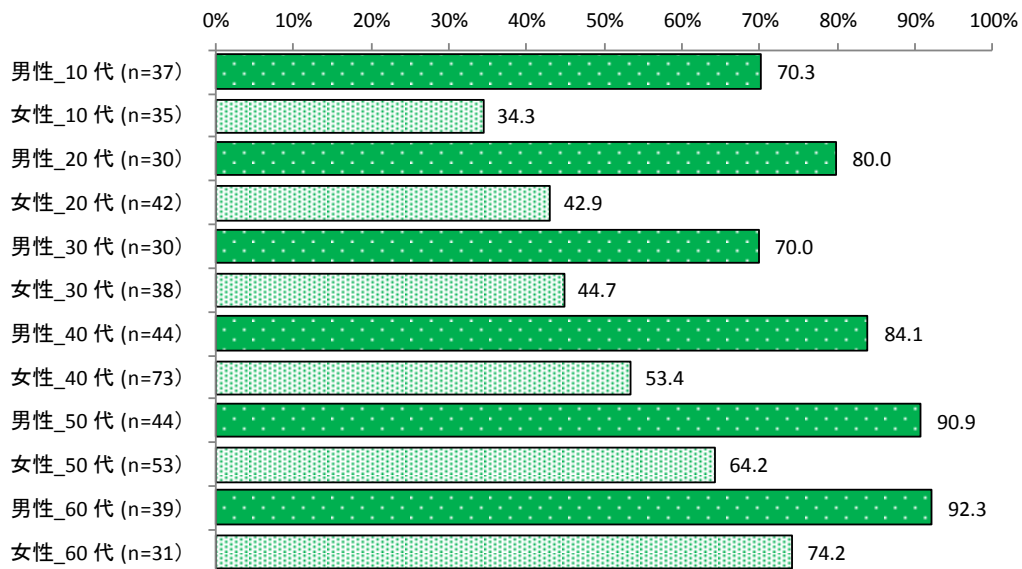


図 26. 性年代別観戦経験者の割合【観戦者調査】

#### 4. 観戦理由

図 27 にスタジアムでの観戦理由についてたずねた結果を示した（複数回答）。最も多くの者が該当すると回答しているのは「ラグビー観戦が好きだから」（56.5%）という理由である。次いで「好きな選手がいるから」（51.0%）、「チームを応援しているから」（44.0%）、「家族や友人に誘われたから」（17.9%）、「周囲で話題になっているから」（16.7%）、「レジャーとしてスポーツ観戦を楽しみたかったから」（16.7%）、「チケット・招待券をもらったから」（16.5%）と続く。

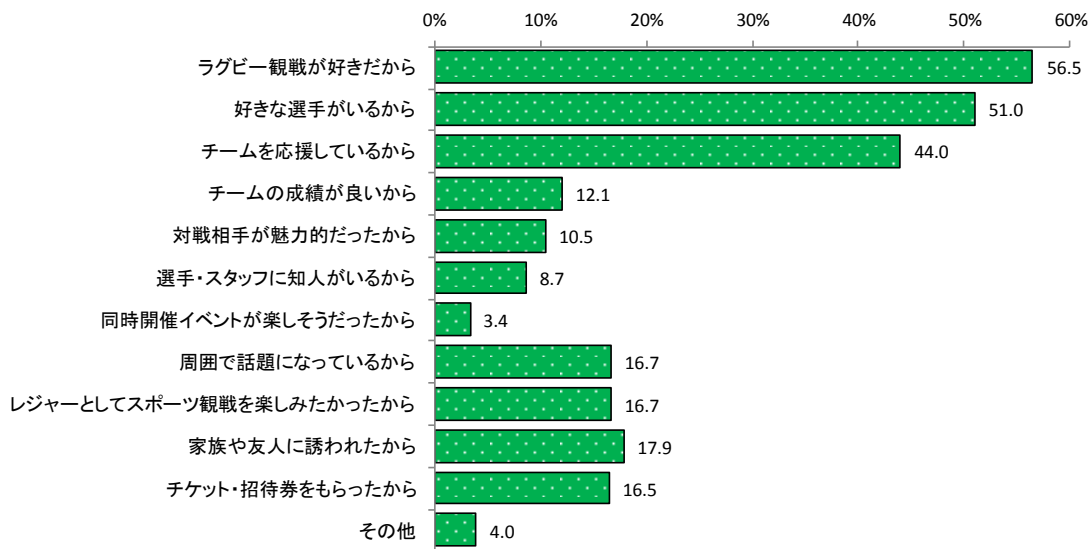


図 27. スタジアムでの観戦理由【観戦者調査】(n=496)

男女別に傾向を比較すると(図 28)、「ラグビー観戦が好きだから」という理由に男性 67.4%、女性 47.4%と大きな差があらわれている。また、女性の方が男性よりも高い割合で該当すると答えている理由を値の高い順に並べると「好きな選手がいるから」(男性: 42.9%、女性: 57.7%)、「チームを応援しているから」(男性: 43.8%、女性: 44.1%)、「周囲で話題になっているから」(男性: 12.9%、女性: 19.9%)、「家族や友人に誘われたから」(男性: 16.1%、女性: 19.5%)、「チケット・招待券をもらったから」(男性: 13.8%、女性: 18.8%)、「同時開催イベントが楽しそうだったから」(男性: 2.7%、女性: 4.0%)となる。

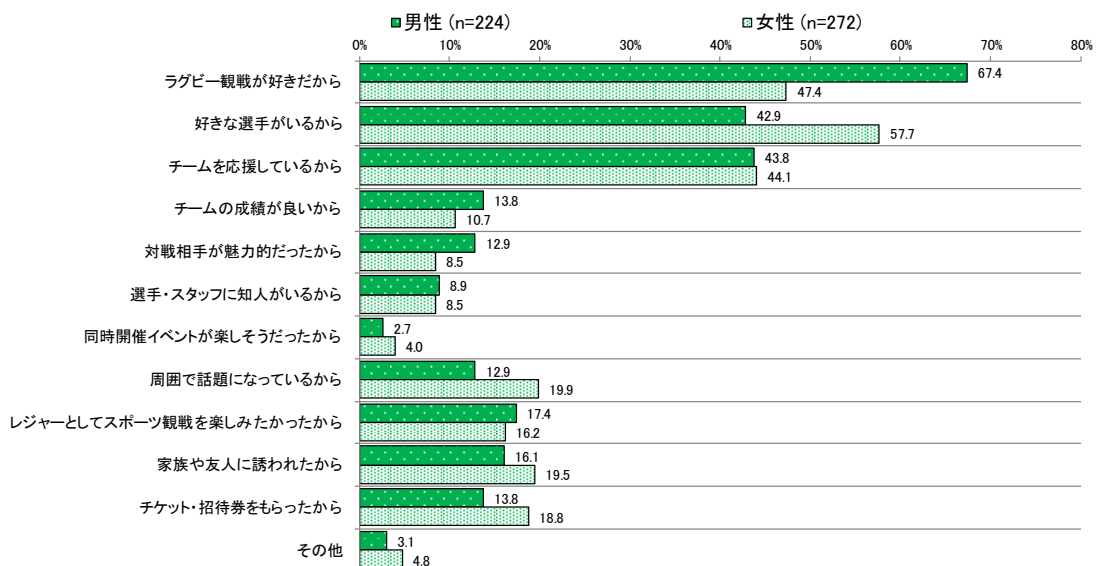


図 28. スタジアムでの観戦理由(男女別)【観戦者調査】

図 29 には年代別の観戦理由を示した。各年代で大きな差が認められるものは「ラグビー観戦が好きだから」（20 代以下：41.7%、30-40 代：56.2%、50 代以上：69.5%）、「チームを応援しているから」（20 代以下：31.3%、30-40 代：40.5%、50 代以上：58.7%）、「家族や友人に誘われたから」（20 代以下：34.0%、30-40 代：11.9%、50 代以上：10.8%）という理由である。統計的に有意な差とはならないものの、20 代以下の年代が他の年代よりも高い値を示しているのは「チケット・招待券をもらったから」（20 代以下：26.4%、30-40 代：14.1%、50 代以上：10.8%）、「レジャーとしてスポーツ観戦を楽しみたかったから」（20 代以下：18.1%、30-40 代：14.6%、50 代以上：18.0%）、「周囲で話題になっているから」（20 代以下：20.8%、30-40 代：17.8%、50 代以上：12.0%）という理由である。

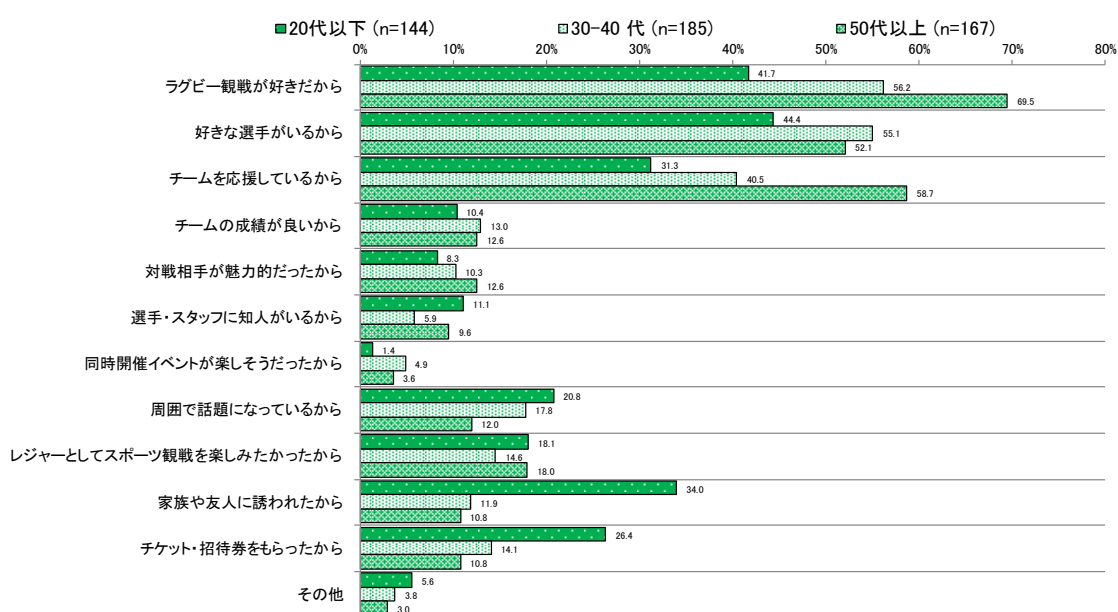


図 29. スタジアムでの観戦理由（年代別）【観戦者調査】

図 30 には「観戦経験あり」の群と「観戦経験なし」の群に分けてそれぞれの観戦理由を示した。有意な差があらわれている理由は「ラグビー観戦が好きだから」（観戦経験あり：70.6%、観戦経験なし：30.2%）、「チームを応援しているから」（観戦経験あり：51.7%、観戦経験なし：28.4%）というものである。有意な差とはなっていないものの、「観戦経験なし」の群が高い値を示したものは、「家族や友人に誘われたから」（観戦経験あり：13.1%、観戦経験なし：27.8%）、「周囲で話題になっているから」（観戦経験あり：12.5%、観戦経験なし：24.1%）という理由であった。



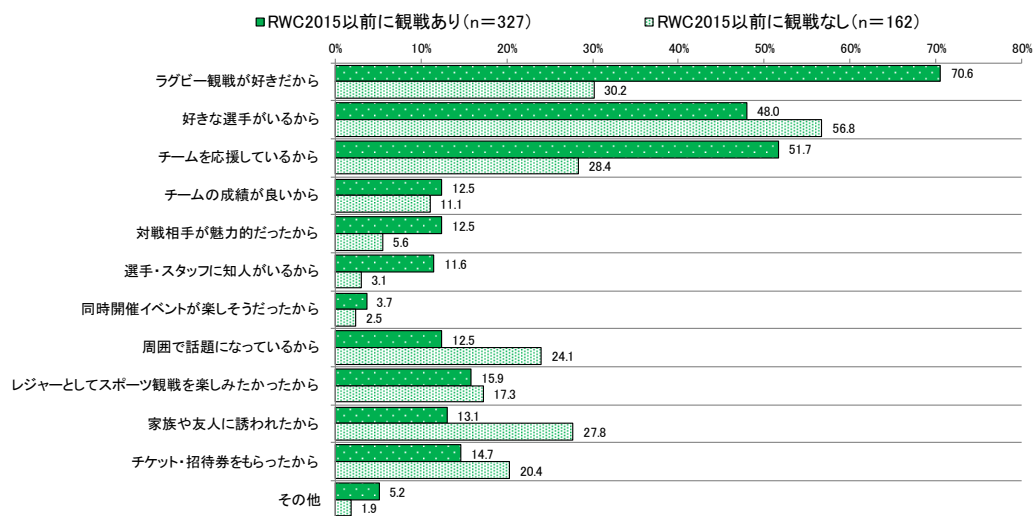


図30. スタジアムでの観戦理由（観戦経験の有無）【観戦者調査】

### 5. ラグビートップチームへの要望

図31には「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」を示した（複数回答）。実施希望が高いものは「選手やチームによる学校や職場訪問」（36.9%）、「選手やチームによるルール解説講座」（35.7%）、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」（29.8%）などであった。

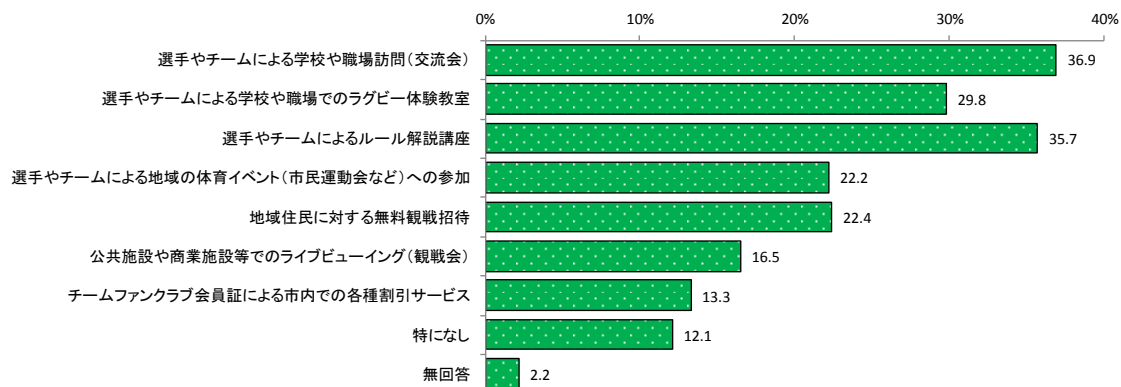


図31. ラグビートップチームに対して実施を希望すること【観戦者調査】(n=496)

図 32 には男女別に「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」を示した。男女の回答に有意な差があるものは見られないが、女性の回答が男性よりも高い値を示したものを挙げると「選手やチームによる学校や職場訪問（交流会）」（男性：32.1%、女性：40.8%）、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」（男性：27.2%、女性：32.0%）、「選手やチームによるルール解説講座」（男性：30.8%、女性：39.7%）、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」（男性：27.2%、女性：32.0%）、「選手やチームによる地域の体育イベント（市民運動会など）への参加」（男性：21.9%、女性：22.4%）となる。

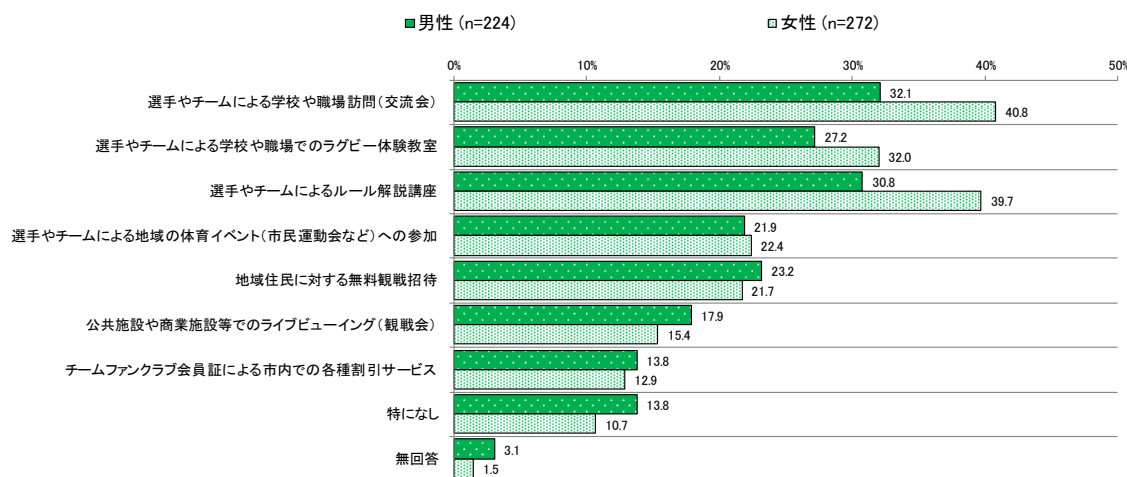


図 3 2. ラグビートップチームに対して実施を希望すること（男女別）【観戦者調査】

図 33 には年代別に「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」を示した。統計的に有意な差を示したのは「選手やチームによる学校や職場訪問」（20 代以下：45.1%、30-40 代：38.4%、50 代以上：28.1%）、「選手やチームによるルール解説講座」（20 代以下：25.7%、30-40 代：37.3%、50 代以上：42.5%）、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」（20 代以下：36.1%、30-40 代：34.6%、50 代以上：19.2%）であった。

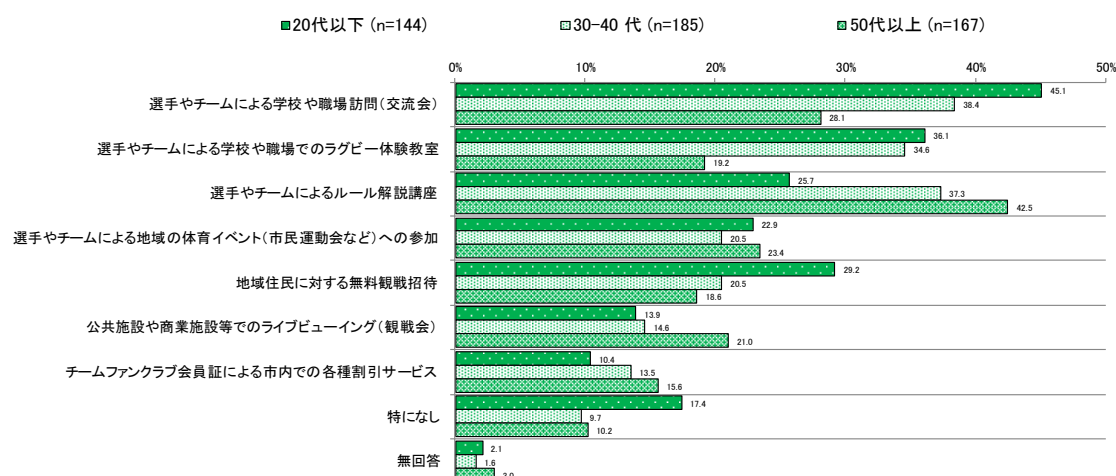


図 3 3. ラグビートップチームに対して実施を希望すること（年代別）【観戦者調査】

図 34 には居住地別（「近隣」－「近隣ではない」）に「ラグビートップチームに対して実施を希望すること」を示した。統計的に有意な差を示したものはなかったものの、「近隣」群で高い値を示したものは「選手やチームによる学校や職場訪問（「近隣」：42.1%、「近隣ではない」：32.0%）、「選手やチームによる学校や職場でのラグビー体験教室」（「近隣」：33.8%、「近隣ではない」：26.2%）、「選手やチームによる地域の体育イベント（市民運動会など）への参加」（「近隣」：26.7%、「近隣ではない」：18.0%）などであった。一方で、「近隣ではない」群で高い値を示したのは、「選手やチームによるルール解説講座」（「近隣」：32.1%、「近隣ではない」：39.1%）、「公共施設や商業施設等でのライブビューイング」（「近隣」：14.2%、「近隣ではない」：18.8%）などであった。

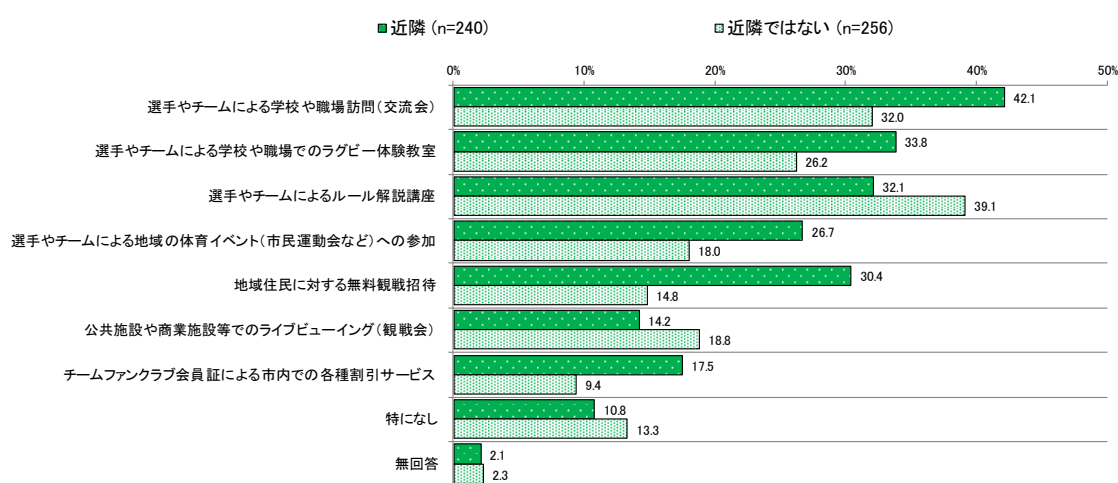


図 3 4. ラグビートップチームに対して実施を希望すること（居住地別）【観戦者調査】

（岡本純也）